

横浜 Yokohama Renaissance ルネサンス



Number 17

特集

ハマの市民放送局

Who's Who in YOKOHAMA

藤本裕子

diana

横浜信用金庫

ごあいさつ

横浜信用金庫理事長
斎藤 寿臣

東日本大震災で被災された皆様に心よりお見舞い申し上げます。

『横浜ルネサンス』第17号をお届けします。『横浜ルネサンス』は、当金庫の創立80周年記念事業の一環として、2002年10月に創刊しました。当初は年1回の発行でしたが、2006年から春と秋の年2回発行とされています。

本号では、特集「ハマの市民放送局」と題して、さまざまな視点から横浜の街の魅力をインターネット放送する方々を取りました。

WHO's WHO in YOKOHAMAでは、横浜ベイスターズ専属チアチームのdianaと、「お母さん業界新聞」編集長の藤本裕子さんをご紹介します。

第10回「横浜の聴き方」では、山崎ハコの『未・発・表』を取り上げています。

『横浜ルネサンス』第17号、お楽しみいただければ幸いです。

A Table of Contents

横浜絵解き図絵	2
目次／理事長挨拶	3
特集 ハマの市民放送局	
磯田守人 YCMB 代表	4
やんちゃで C 調 まじめにバカやる放送局	
荒木智恵子 ストリート 55 代表	6
地域の才能を活かす ふれあいの場づくり	
伊藤幸晴 港北ふるさとテレビ局代表	8
港北の現在と歴史を記録し アーカイブを目論む	
小泉 学 はまっこストリーム・ディレクター	10
週に一度、生放送で ハマの最新情報を発信	
木村 静 ポートサイド・ステーション・プロデューサー	12
野菜から政治まで 多様な情報を市民目線で	
宮島真希子 横浜ストリーム・ディレクター	14
地域の人みずからが 発信できる情報環境を整備	
横浜を詠む 水原紫苑 写真：矢部志保	16
Who's Who in YOKOHAMA	
diana 横浜ベイスターズ専属チアチーム	18
ファンと一緒に ベイスターズをサポート	
藤本裕子 「お母さん業界新聞」編集長	20
ぬくもりに満ちた記事で お母さんたちに笑顔を	
横浜の聴き方 第 10 回 中島 久	22
『未・発・表』山崎ハコ	
横浜ジェリービーンズ俱楽部通信	23

◎横浜絵解き図絵

コーヒー生豆の輸入



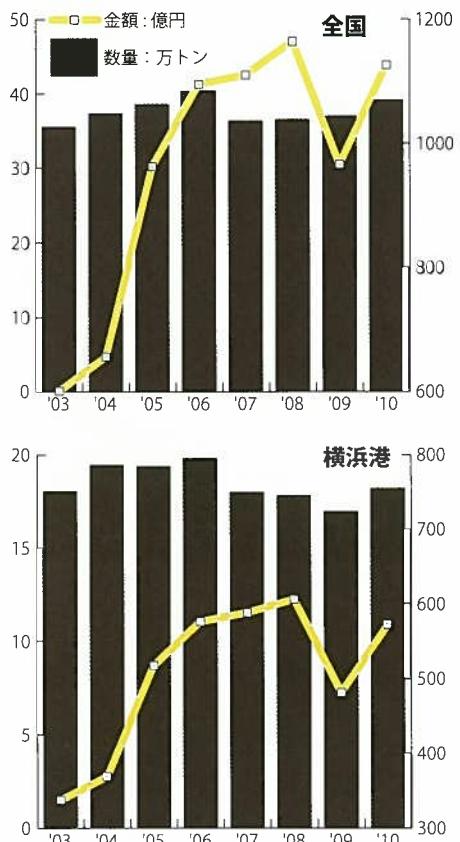
コーヒーの生豆は、赤道をはさんで北緯25度及び南緯25度の間の「コーヒーベルト」と呼ばれる地域の国々で、そのほとんどが生産されている。コーヒーの生豆は、コーヒーの木と呼ばれる熱帯性の低木から収穫される。

コーヒーの木は、基本的には高原に生える植物で、平均気温が20℃前後、年間降水量が1,500～2,000ミリくらいのところが、栽培に適しているといわれている。また、高度は高いところの方が望ましく、1日のうちの気温差が大きい方が良いとされている。

これらの地域で栽培されたコーヒーの木から、コーヒーの実が収穫され、その実の中にある種子が、コーヒー生豆となる。私たちが普段飲んでいるレギュラーコーヒーやインスタントコーヒーは、このコーヒー生豆が、焙煎、配合、粉碎、抽出されて製品化したものだ。

横浜港は、コーヒー生豆の輸入において、1990年(平成2)から、昨年(2010年)までの間、

コーヒー生豆輸入量の推移



輸入数量及び輸入金額ともに21年連続して全国第1位のシェアを占めている。

横浜税關 調査部 調査統計課資料および Wikipedia より作成

横浜のフツーのオンナノコ達をモデル（hamajo model）に起用し、彼女達がやりたいコト、知りたいコト、見せたいコト、自分たちで発信する情報誌。《オナノコによる、オナノコのための》オナノコのリアルをお届けするフリーペーパーです。モデルは随時募集中！ <http://hamajo.jp>

【表紙＆裏表紙】撮影：矢部志保
衣装協力：横浜タカシマヤ 4階 レベッカ テイラー

モデル■タカクユイ

hamajo vol.0の表紙も飾ったタカクユイ、hamajoモデルの中でも人気の高い彼女はhamajoモデルをやりながら、日吉のヘアサロン《C-LOOP UNITED ACT ZIP》でアシスタントとして活躍中。

タカクユイblog：

<http://ameblo.jp/hamajo-takakuyui/>
hamajoとは

東日本大震災から2週間すぎた土曜日の朝、横浜市中央卸売市場本場水産部の片隅で元気で明るい挨拶が飛び交った。「おっす！ 元気？」ビデオも撮影できる小型のデジカメを片手に撮影する「みんなの市場放送局（Yokohama Central Market Broadcasting = YCMB）」の磯田守人さん（写真左）に市場の仲卸のいなせなお兄さんから声がかかる。

「元気だよ。そつちはどうなのよ？」と、カメラを声の方に向けながら挨拶を返す。いかにもなじみという雰囲気だ。

普段は一般客で賑わう市場だが、さすがに取材当日は震災の影響で閑散とした状況。「家に閉じこもっていてなんの役にも立たない。だったら街に元気になつてもらおうと思って」磯田さんは機材を片手に久しぶりに市場に繰り出してきた。

横浜市中央卸売市場は横浜駅から徒歩で約15分。水産物と青果の仲卸100数軒が集中する横浜の台所だ。水産物棟は毎月第1・第3土曜日の朝（午前9時～11時）、市場を一般開放している。普段はできない仲卸からの買物はもちろん、マイナス40度のマグロ用冷凍庫や、魚のおろしの実演などを見学できる。

東日本大震災から2週間すぎた土曜日の朝、横浜市中央卸売市場本場水産部の片隅で元気で明るい挨拶が飛び交った。「おっす！ 元気？」ビデオも撮影できる小型のデジカメを片手に撮影する「みんなの市場放送局（Yokohama Central Market Broadcasting = YCMB）」の磯田守人さん（写真左）に市場の仲卸のいなせなお兄さんから声がかかる。

「元気だよ。そつちはどうなのよ？」と、カメラを声の方に向けながら挨拶を返す。いかにもなじみという雰囲気だ。

普段は一般客で賑わう市場だが、さすがに取材当日は震災の影響で閑散とした状況。「家に閉じこもっていてなんの役にも立たない。だったら街に元気になつてもらおうと思って」磯田さんは機材を片手に久しぶりに市場に繰り出してきた。

横浜市中央卸売市場は横浜駅から徒歩で約15分。水産物と青果の仲卸100数軒が集中する横浜の台所だ。水産物棟は毎月第1・第3土曜日の朝（午前9時～11時）、市場を一般開放している。普段はできない仲卸からの買物はもちろん、マイナス40度のマグロ用冷凍庫や、魚のおろしの実演などを見学できる。

横浜市中央卸売市場の活気

明け方の市場に魅了されて

来るもの拒まず。なんでもありの放送局

そんな中央卸売市場の魅力を伝えようと2008年10月にYCMBはスタートした。

きっかけは、横浜に引っ越して来て間もない頃、近所のカフェバーの人、「市場でごはんしましよう」と誘われて明け方の活気に包まれた市場を体験したこと。

横浜の新参者だった磯田さんは、その前から崎陽軒のシウマイ以外に「名物」はないかと探していくネットで市場に食堂があることを知った。築地が観光名所であるように何かあるのではと直感し、日中に行つてみたら閑散としていた。ところ

が、あらためて誘われるままに朝の5時頃に行つたら別世界だった。

「連れて行かれたのは精肉店なんだけど、店先にテーブルと椅子があつて、生ハムをつまみにワインをごちそうしてくれた。すっかり店の人と仲良くなつた」。

こんなにおもしろい場所があるのに、横浜人は中央卸売市場がどこにあるのかも知らなければ、行ったこともないという。ならば市場を新名所にしようと、参加しているソーシャル・ネットワーキング・サービスの中に「横浜市中央卸売市場を横浜新名所」というコミュニティを立ちあげて、市場を巡るツアーリーを実施した。

そのツアーリー参加者の中に、インター

ネット放送に街おこしの可能性を感じて実践する元蕎麦屋さんがいた。彼によれば、ネットなら、おおげさな機材を持たなくとも誰でも手軽に視聴者と対話しながら放送できるということだった。これなら、手軽に、気楽に、市場をアピールすることができる、YCMBを開局した。

当初は、市場の開放日に合わせて旬の魚の話や、魚の解体実演をレポートしていた。その後に番組を見て放送現場に遊びに来れる人が増えていった。「来るもの拒まず。人の悪口さえ言わなければ好きにしゃべつていい、なんでもありの放送局」と、番組にどんどん登場してもらつた。

それとともに市場とは直接関係のない話題も増えていった。だから、2年近くつたところで、だらだら続けていてもしそうがないと、定期放送を休止した。

「今でも市場関係者との付き合いは続いているけど、市場の魅力は一とおり紹介したし、来場者も増えた。今のコンセプトは『やんちゃでC調 まじめにバカやる放送局』に神出鬼没で活躍中。http://ycmb.seesaa.net/」



(東京都出身)「元雀荘テレビ」アナウンサー。その後、タレントとして「T.V.ラジオ番組」に出演。鶴見区・横浜市・桜木町・みなとみらいの土台パートの司会を務める。1999年～2003年にかけて鶴見西口オーバンカフェ企画、運営・司会を担当し、オープハカツの土台を築く。地域交流拠点手作り品の販売「ストリート55」をオープンし手仕事をする女性を応援している。<http://story55web.fc2.com>

ストリート55 代表

荒木智恵子さん

ふれあいの場づくり 地域の才能を活かす



手作り番組のスタートははらはり

『ハートでトーク』……♪。

繊細なフォーク・シンガーの声が静まりかえった店内に響く。番組のオープニングはアコースティック・ギターの弾き語りによるジングルとともに始まった。緊張の一瞬だ。しかし番組がスタートしたというのにカメラはなかなか司会者をとらえない。

「カメラはこちらを向いていませんけど大丈夫でしょうか?」と、笑いながら呼びかけるのはストリート55代表の荒木智恵子さん(写真右)。

「つるみウオッチャーズ」の木村小百合さん(写真左)は、ひとりで何役もやっているので大変です。ようやく私の顔が映りました。それでは『ハートでトーク』の時間です……。モニター画面を見ていると置頭からいかにもぎこちない様子だが、荒木さんはあわてる様子もなく、流れるようなしやべりでそれをカバーする。

荒木さんは元福島テレビのアナウンサー。放送設備はどこにでもある家庭用機材、小道具もありあわせの手作りだが、番組の送り手はプロそのものだ。カメラ目線もしつかり。声もとても通りがよい。番組はすぐに軌道に乗りはじめた。

発信場所は街づくりの拠点

JR鶴見駅西口から歩いて5分。豊岡町の横浜信用金庫鶴見支店の並びに「ストリート55」というお店がある。ここが『ハートでトーク』の発信場所だ。放送は月1回。毎回地元のゲストを呼んで、原則、第3水曜日午後2時から20分程度インターネットのUSTREAMで生放送されている。普段は、鶴見区の街づくりの拠点という位置づけで運営される手作り品の委託販売のお店だ。

10坪と広いとはいえない店内に入ると、人形、アクセサリー、洋服など地元作家のさまざまなジャンルの作品がびっしりとレンタルラックにディスプレーされている。「地域には才能ある人がたくさんいる。それぞれが、それぞれの場所で、それぞれの仕事ができるようサポートし、ふれあいの場を作ればみんなきいきとして、地域も活性化するはず」

そんな思いで荒木さんが2004年(平成16)に空き店舗を借りて社会実験としてスタートさせた。年商は700万円程度と小さいが、サンケイリビング新聞社主催の「第3回女性起業家支援キャンペー」のグランプリである「リビング賞」を受賞している。

将来の夢は放送の多言語化

荒木さんが市民放送をはじめたのは2010年(平成22)の9月。(ニロミの取材で訪れた木村さんと意気投合したこと)がきっかけだった。以前に鶴見の街情報報を発信するサテライトスタジオを区役所に提案してボツになつたこともあつたが、めげていなかつたことも幸いした。

また、技術的にわからないところは鶴見の街でパソコン教室を主宰する男性に助けてもらえたことも具体化を推進するきっかけとなつた。

しかし、なによりも原動力となつたのは、荒木さんの前向きな考え方だった。「冷や汗かきながらでも、何かをしたほうが、何が足りないかを知ることができ。足りないものは力を出し合えば必ず実現できる。そして、小さなことでも目に見える形にすれば街は変わる」

一方、仲間の木村さんが市民放送にかかる動機と夢は、多言語による放送。「鶴見には、ブラジルやアルゼンチンなど南米の人を中心につくさん外国人が暮らしている。そんな人たちのお話を聞いて交流できれば、きっと楽しい街になる」。

お二人のポジティブ・シンキングによって支えられている街づくり放送局だった。

横浜市港北区に住みはじめて、およそ25年。伊藤幸晴さんは次第に「港北がふるさとと思えるようになってきたんです」と振り返る。かつて伊藤さんは衛星通信のエンジニアとして海外の各地に駐在し、外国と日本を半年ごとに行き来する暮らしせど送ってきた。

「実はその頃、自分の住んでいる街に関心が薄かつたんです。ところが、海外から戻ってくると、近所の街並みが変化していることに気づきました。新しい建物ができる、『あれ、ここ、前は何だっけ?』と思い出せなくて。そうしたわけで、港北に興味を抱き始めました」

そこで伊藤さんは、港北地域の現在の街並みや史跡、文化財を映像によって記録しようと思いつ立ち、ビデオカメラを抱えて街に出かけるようになつた。

「港北の昔の写真を集めて写真集にした人がいましてね。でも、港北を撮つた動画はあまり残されていないのが現状です。ですから、いま撮つておけば、やがて10年、20年経つと貴重な映像になるはずであります。どこにでもあるような、港北の何でもない普通の光景が、いずれ文化財になるかもしれません」

日常的な光景の記録も、いざれ文化財に

横浜市港北区に住みはじめて、およそ25年。伊藤幸晴さんは次第に「港北がふるさとと思えるようになってきたんです」と振り返る。かつて伊藤さんは衛星通信のエンジニアとして海外の各地に駐在し、外国と日本を半年ごとに行き来する暮らしせど送ってきた。

「実はその頃、自分の住んでいる街に関心が薄かつたんです。ところが、海外から戻ってくると、近所の街並みが変化していることに気づきました。新しい建物ができる、『あれ、ここ、前は何だっけ?』と思い出せなくて。そうしたわけで、港北に興味を抱き始めました」

そこで伊藤さんは、港北地域の現在の街並みや史跡、文化財を映像によって記録しようと思いつ立ち、ビデオカメラを抱えて街に出かけるようになつた。

「港北の昔の写真を集めて写真集にした人がいましてね。でも、港北を撮つた動画はあまり残されていないのが現状です。ですから、いま撮つておけば、やがて10年、20年経つと貴重な映像になるはずであります。どこにでもあるような、港北の何でもない普通の光景が、いずれ文化財になれるかもしれません」

港北ふるさとテレビ局代表

伊藤幸晴さん



アーティストとしての活動を目論む 港北の現在と歴史を記録し

自分が暮らす街にも歴史があると発見

当初は個人で活動していた伊藤さんは、2年前に「港北ふるさとテレビ局」をスタートさせた。主に港北の様子を撮影した映像を保存し、テレビ局への映像提供やインターネット配信を行う小さなテレビ局だ。そして、港北区役所の後援を得たことで、活動の幅が広がった。

「個人だと取材が難しいケースでも、テレビ局ということで取材がしやすくなりました。それに、次第にネットワークが広がつることによって、イベントや市民サークルの情報も以前より多く入るようになりました。何十団体と知り合い、ともに行動しています」

そのひとつが「港北地名と文化の会」。バス停にしか残されていない地名を探り当たり、旧街道を歩いたりするサークルだ。本誌の取材当日も、伊藤さんは彼らと一緒に街を歩き、その模様を記録した。

「このサークルとともに活動するうち、街並みや史跡、文化財を映像によって記録しようと思いつ立ち、ビデオカメラを抱えて街に出かけるようになつた。

「港北の昔の写真を集めて写真集にした人がいましてね。でも、港北を撮つた動画はあまり残されていないのが現状です。ですから、いま撮つておけば、やがて10年、20年経つと貴重な映像になるはずであります。どこにでもあるような、港北の何でもない普通の光景が、いずれ文化財になるかもしれません」

テレビ局とホームビデオの中間的存在

この夏、港北ふるさとテレビ局は、「港北ふるさと映画祭」を開催する(8月20日、10時~16時、港北公会堂にて)。この街を撮つた映画が集結する上映会だ。「多くの人に地域の映像を見せたいと望んでいても、インターネットではやはり限りがあります。見せる機会をいかに増やすかが課題ですね」

伊藤さんは市民テレビ局ならではの意義について、次のように語る。

「有名タレントが出演する大手テレビ局は、視聴者にとって遠すぎる存在です。一方でホームビデオは、撮影した人の家族や友人が映つているだけ。港北ふるさとテレビ局は、その中間でありたい。映像の中に近所の人を見つけて『あつ、この人知つてる』とか『あの店だ』といったような感じですね。それがきっかけで、交流も生まれます」

そう語る伊藤さんの次の目標は本になつていらない昔話の記録。「お年寄りしか知らない昔話は、その方が亡くなると風化してしまいますからね。平日は会社勤めのため、活動は休日に限られる。伊藤さんは、こうこぼした。

「家族からは非難どころですよ」▼

以前は、電波で映像を広く発信できるのはテレビ局に限られていた。だが昨今では、誰でもインターネット上に動画が投稿でき、好きな時に見られるサービスが人気を呼んでいる。

その中でもUSTREAMは、生放送でも映像が発信・受信できるとあって話題となっている。

このサービスを活用した一例が、昨年秋にスタートした「はまっこストリーム」だ。横浜のいろいろな場所をスタジオとして、毎週水曜日の19時から20時まで配信される（後日でも視聴可能）。番組は軽快なテーマソングで始まり、英会話講師の瀬沼潤さんの司会で、いくつものコーナーが展開される。「先週横浜でこんなことが」「今週は横浜のここに注目」、ゲストを招く「今週のスポーツライター」、さらには瀬沼さんによる「なちゅらのサバイバル英語術」もあり、盛りだくさんだ。

そのディレクターを務める小泉学さんは「横浜のイベントや話題、そしてがんばっている浜っ子たちを紹介する番組です。この番組で、横浜の人と人、人と団体、団体と団体のつながりが広がればいい」といふ。

小泉さんは学生時代、放送部に所属。ほのかに放送に憧れを抱いていた。一方で、もともと趣味はコンピュータ。インターネットが普及する以前から、コンピュータ台でも放送できる。

その手軽さのせいか、このところ、インターネットを利用したライバルの市民メディアは増えつつある。なのに小泉さんは、気にしていない。それどころか「ライバル番組がどんどん出てきてほしい」と語る。

「インターネットによって映像を発信する」というと、高度な技術や知識が必要だと考えている人はたくさんいます。でも、それは誤解。実はハードルは高くありません。はまっこストリームは、「動画配信は、こんなに簡単にできるんですよ」というサンプルを示す番組もあるんです」

実際、はまっこストリームの開局費は、低予算どころか0円だった。

「いまは、八百屋や魚屋のおじさんがみずから映像を発信できる時代なんですね。また、リタイア世代の方々が、コープラスや三味線といった自分の趣味について番組を作つて放映することもできる。クチコミを作つて放映することもできる。クチコミみたいな市民メディアが、もっと増えてい

市民ならではの情報を取り上げる

以前は、電波で映像を広く発信できるのはテレビ局に限られていた。だが昨今では、誰でもインターネット上に動画が投稿でき、好きな時に見られるサービスが人気を呼んでいる。

その中でもUSTREAMは、生放送でも映像が発信・受信できるとあって話題となっている。

このサービスを活用した一例が、昨年秋にスタートした「はまっこストリーム」だ。横浜のいろいろな場所をスタジオとして、毎週水曜日の19時から20時まで配信される（後日でも視聴可能）。番組は軽快なテーマソングで始まり、英会話講師の瀬沼潤さんの司会で、いくつものコーナーが展開される。「先週横浜でこんなことが」「今週は横浜のここに注目」、ゲストを招く「今週のスポーツライター」、さらには瀬沼さんによる「なちゅらのサバイバル英語術」もあり、盛りだくさんだ。

そのディレクターを務める小泉学さんは「横浜のイベントや話題、そしてがんばっている浜っ子たちを紹介する番組です。この番組で、横浜の人と人、人と団体、団体と団体のつながりが広がればいい」といふ。

簡単に実現できるインターネット放送

インターネット放送の特徴は、パソコンと通信環境が整えば誰でもその日から放送できること。大げさな機材を購入する必要はない。極端な話、スマートフォン一台でも放送できる。

その手軽さのせいか、このところ、インターネットを利用したライバルの市民メディアは増えつつある。なのに小泉さんは、気にしていない。それどころか「ライバル番組がどんどん出てきてほしい」と語る。

「インターネットによって映像を発信する」というと、高度な技術や知識が必要だと考えている人はたくさんいます。でも、それは誤解。実はハードルは高くありません。はまっこストリームは、「動画配信は、こんなに簡単にできるんですよ」というサンプルを示す番組もあるんです」

実際、はまっこストリームの開局費は、低予算どころか0円だった。

「いまは、八百屋や魚屋のおじさんがみずから映像を発信できる時代なんですね。また、リタイア世代の方々が、コープラスや三味線といった自分の趣味について番組を作つて放映することもできる。クチコミを作つて放映することもできる。クチコミみたいな市民メディアが、もっと増えてい

市民メディアとマスコミは補完関係

小泉さんは学生時代、放送部に所属。ほのかに放送に憧れを抱いていた。一方で、もともと趣味はコンピュータ。インターネットが普及する以前から、コンピュータ台でも放送できる。

その手軽さのせいか、このところ、インターネットを利用したライバルの市民メディアは増えつつある。なのに小泉さんは、気にしていない。それどころか「ライバル番組がどんどん出てきてほしい」と語る。

「インターネットによって映像を発信する」というと、高度な技術や知識が必要だと考えている人はたくさんいます。でも、それは誤解。実はハードルは高くありません。はまっこストリームは、「動画配信は、こんなに簡単にできるんですよ」というサンプルを示す番組もあるんです」

実際、はまっこストリームの開局費は、低予算どころか0円だった。

「いまは、八百屋や魚屋のおじさんがみずから映像を発信できる時代なんですね。また、リタイア世代の方々が、コープラスや三味線といった自分の趣味について番組を作つて放映することもできる。クチコミを作つて放映することもできる。クチコミみたいな市民メディアが、もっと増えてい

はまっこストリーム・ディレクター

小泉 学さん



ハマの最新情報発信

隔週の火曜日の夜、「今週のやさい」という番組が大桟橋にあるインターねつト放送局「ポートサイド・ステーション（PSS）」から放送されている。横浜で開かれる野菜市を訪れ、神奈川県内で栽培された旬の農作物やその料理方法、生産農家のエピソードなどを伝える内容だ。この番組のプロデューサーとして企画・制作に携わり、みずからキヤスターも務める木村さんはいう。

「北海道育ちの私にとって、神奈川は都会のイメージでした。それなのに、こんなに豊富に野菜が採れるんだと知って驚きましたね。そして食べてみたら、これがおいしいくて（笑）」

この野菜市は、南太田のNPO法人よこはま里山研究所NORAで開催されているもの。小売店に出回らない作物も販売しているところに大きな特色がある。「農家を一軒一軒回って、生産者とコミュニケーションをとり、野菜を預かつて紹介する野菜市なんです。番組は、野菜を通して、食と農と流通、そして地産地消について、視聴者が考るきっかけになってくれればと思いながら制作しています」

神奈川県産の旬の野菜をレポート

硬軟の企画内容を多様なスタイルで放送

「横浜の朝日ジャーナル」とうそぶく

PSSは、総合的な市民メディア・サイ

ト。映像番組のみならず、横浜の音楽や

展覧会などの文化情報を写真と文章で紹

介するコーナーもあれば、横浜でユニー

クな活動に取り組む人にインタビューし

た模様をラジオ番組形式で届ける企画もあ

る。要するに、テレビや雑誌、ラジオな

ど、さまざまなメディアのスタイルを混在

させながら、横浜の現在を伝えている。

「映像のほうが伝えやすい内容は映像で、

声が向いているものはラジオ形式で、と

いつたように、どの手段がもっとも適切な

のかをつねに念頭に置いていますね」

また、扱う内容の幅も広い。「今週のや

さい」のような身近な話題から、政治問

題、環境問題まで、硬軟取り混ぜてライ

ンナップされている。東日本大震災が起き

て以降は、東北各県のミニFM局をリン

クして現地の模様がすばやく伝わるよう

なアップ・トゥ・ディトな編成もしている。

「どの企画にも共通するのは、地域に根

ざした情報を市民目線で発信したい、と

いうことです。さまざまなネットワークを

通じて、お互いに結びつきあいながら情

報を提供したいと考えています」

身内として受け入れられるメディア

実は木村さんは横浜に来て、まだ日が浅い。もともとは、札幌の地域密着型FM局でキヤスターを務めたり、ミニコミ誌の編集を担当したりしていた。

「札幌では、地域の多くの人々に会い、情報発信による街づくりをしてきました。そして、いまも横浜で同じことをしています。私は学校を卒業してずっとフリーターで、ちゃんと就職していないことに後ろめたさがありました。いつたん就職のきっかけを失うと、雇用の機会が乏しくなつて社会に出たくても出られなくなる。そして萎縮しがちになる。そんな状況を踏まえた若い女性の視点で、情報を伝えたい」と

そんな木村さんだからなのか、取材先では初対面の人からも、「木村さんでしょ」とか「ネットで見たよ」と声をかけられる機会が増えたという。

「思うことを正直に発信しているから、身内として同じ悩みや問題意識を抱える仲間として、受け入れてくれるようで、うれしいですね。取材で会った人たちから、また次の人にへつながるもの楽しい」

横浜の市民メディア活動には、地域の

ポートサイド・ステーション・プロデューサー

木村 静さん



野菜から政治まで、多様な情報を市民目線で

「インターネットで何か発信したいけれど、経験がない人たちがまだまだたくさんいるのが現状です」と語るのは、「横浜ストリーム」でディレクターを担当する宮島真希子さん。横浜ストリームとは、地域の人たちみずからが地元の情報を伝える環境をつくり出すプロジェクト。2010年7月から2011年2月にかけて展開された。この企画は、総務省が実施した「情報通信技術地域人材育成・活用事業交付金『ICTあること元気事業』」に採択。宮島さんが理事を務めるNPO法人横浜コミュニケーション・ラボが中心となり、t.v.kなど複数の組織と連携して運営された。そして、宮島さんが重点を置いたのが人材育成である。

「受講者個々の視点を活かすことを第一としました。しかし、そうであっても取

材や撮影の方法、記事や映像の作成、そ

れに企画の立て方など、情報を発信する

際には多くのスキルが不可欠です。それ

ら自身につけて地域レポーターとなれる

よう、さまざまな講座のプログラムを企

画・立案しました。レベル別に基礎と応

用コースを用意し、前者では機材の接続

方法から始めたほどです」

「こうして培った人材のネットワークを今後は横浜の共有財産にしていきたい」

人材育成講座で地域レポーターを養成

「インターネットで何か発信したいけれど、経験がない人たちがまだまだたくさんいるのが現状です」と語るのは、「横浜ストリーム」でディレクターを担当する宮島真希子さん。横浜ストリームとは、地域の人たちみずからが地元の情報を伝える環境をつくり出すプロジェクト。2010年7月から2011年2月にかけて展開された。この企画は、総務省が実施した「情報通信技術地域人材育成・活用事業交付金『ICTあること元気事業』」に採択。宮島さんが理事を務めるNPO法人横浜コミュニケーション・ラボが中心となり、t.v.kなど複数の組織と連携して運営された。そして、宮島さんが重点を置いたのが人材育成である。

「受講者個々の視点を活かすことを第一としました。しかし、そうであっても取

材や撮影の方法、記事や映像の作成、そ

れに企画の立て方など、情報を発信する

際には多くのスキルが不可欠です。それ

ら自身につけて地域レポーターとなれる

よう、さまざまな講座のプログラムを企

画・立案しました。レベル別に基礎と応

用コースを用意し、前者では機材の接続

方法から始めたほどです」

「こうして培った人材のネットワークを今後は横浜の共有財産にしていきたい」

街角の電子看板で防災情報を発信

このプロジェクトは、地域レポーターから寄せられた数々の情報をデジタルサイネージ（街頭に設置された電子広告看板）でも流す前提で取り組まれた。

この映像装置は通信回線と接続され、遠隔地から映像の内容が切り替えられる。そこで、普段の地域の出来事はもとより、災害時の防災情報を発信する基盤の構築や、被災地の情報などを地域住民が発信することを横浜ストリームでは目論んだ。「昨今の映像機器は進化していますが、大切なのはハードよりもソフト。地域の人たちに向けて、そのエリアの情報を伝えることで、人々の間につながりが生まれます。このつながりを重視し、地域レポート一回の交流を促したい」

また、地域内の人の交流だけではなく、分野間をまたがるつながりをもたらすことも意図した。

横浜ストリームの人材育成講座で、雑誌編集者や大学教員、落語家などさまざまなジャンルで活躍する人たちをゲストとして招いてクロストークを展開することによってである。

「こうして培った人材のネットワークを今後は横浜の共有財産にしていきたい」

各自の眼差しで情報を発信する効用とは

以前、宮島さんは神奈川新聞に勤めていた。数々の部署で記者を務めたものの、新聞というメディアに次第に限界を覚え、そのようになったと振り返る。

「新聞記者は、警察や役所など多くの情報が集まるところに取材に行きます。つまり、限定された情報収集の範囲で、限られた人数の記者が取材する。また、紙面や締切という制約もあります。もともと、業務として効率的に日々の新聞を発行するためには、それは当然のこと。しかしそれでは、おのずと市民側の視点が乏しくなります。その一方、それぞれのエリアに暮らす多くの地域レポーターが各自の眼差しで情報を発信すれば、こうした制約や限界を解消することができます。

このことは、市民メディアにどうて重要なこと。ですから今後も、地域のことを発信したいけれどその術がない人たちのお手伝いをしていきたいと考えています」

本特集で折に触れて伝えてきたように今は誰でも発信できる時代。プロの経験や視点をアマに伝えようとする宮島さんのような人材が出てきたことは、社会の成熟を意味しているのかもしれない。▼

横浜ストリーム・ディレクター

宮島真希子さん



発地域の人みずからが 発信できる情報環境を整備

川崎総局をスタートし記者を務め、2003年にデジタルメディア局に異動。05年、ユーチューバーとの相互コミュニケーションを狙ったサイト「ガナロコ」を開設。10年に退社後、人の多様なつながりを活発にする地域情報化について活動を続ける。

夏の夜の船出の汽笛 see youと きみの声にてきこゆることし

水原紫苑

写真 矢部志保

港からずいぶん離れた我が家にも、船の汽笛はよく聞こえて来る。ほうつと、かすむような音だが、よく耳をすませていると、親しい誰かの声に似ている。

遠い海の彼方に行く船よ、いつか、また、きっと横浜に来てください。

港育ちの、この不思議ななつかしさ、人恋しさはなぜなのだろう。

see you

みづはらしおん 歌人。1959年神奈川県生まれ。早稲田大学大学院修了。春日井建に師事し、以降歌集『ひあんか』『客人(まらうど)』『くわんおん(觀音)』『いろせ』『あかるたへ』、著作『世阿弥の草(星の肉体)』『京都うた物語』などを発表。現代歌人協会賞受賞。駿河梅花文学賞、河野愛子賞など多数受賞。

やべしほ 写真家。1974年生まれ。奈良県出身。同志社女子大学短期大学部日本語日本文学科卒業。96年ドイツに渡り、日本語教師となる。帰国後、平地塾に師事し、独立。渡辺貞夫らミュージシャンを多く撮影している。

港からずいぶん離れた我が家にも、船の汽笛はよく聞こえて来る。ほうつと、かすむような音だが、よく耳をすませていると、親しい誰かの声に似ている。

遠い海の彼方に行く船よ、いつか、また、きっと横浜に来てください。

港育ちの、この不思議ななつかしさ、人恋しさはなぜなのだろう。

see you

みづはらしおん 歌人。1959年神奈川県生まれ。早稲田大学大学院修了。春日井建に師事し、以降歌集『ひあんか』『客人(まらうど)』『くわんおん(觀音)』『いろせ』『あかるたへ』、著作『世阿弥の草(星の肉体)』『京都うた物語』などを発表。現代歌人協会賞受賞。駿河梅花文学賞、河野愛子賞など多数受賞。

やべしほ 写真家。1974年生まれ。奈良県出身。同志社女子大学短期大学部日本語日本文学科卒業。96年ドイツに渡り、日本語教師となる。帰国後、平地塾に師事し、独立。渡辺貞夫らミュージシャンを多く撮影している。

横浜スタジアムに足を運ぶ楽しみは、試合を見ることだけとは限らない。横浜ベイスターズ専属チアチーム diana (ディアナ)とともに、横浜ベイスターズを応援することも醍醐味のひとつだ。メンバーは現在18名。1年に一度のオーディションによって選ばれ、ダンス経験豊富な女性が揃う。

「いつも、試合を盛り上げようという気持ちで踊ります。とくに接戦の時にはテンションも高まります。でも、踊ることだけが私たちの務めではありません。ダンスの他にも、さまざまごとに取り組んでいます」と語るのは今年からプレイング・ディレクターとなった野村梨紗さん。たとえば、試合中に主審にボールを届けるボールガールも、diana の役割のひとつだ。

メンバーのひとり田頭美穂さんは語る。「ボールガールは一人一組で担当しています。とにかく、ずっと審判を見てますね。ボールを求めるサインを見逃さずですか。それに、審判によってボールを変える頻度が違いますし、サインもそれぞれ癖があります。最近、ようやく審判一人ひとりの癖がつかまってきた」

それだけではない。今年は、球場内のコンコースで募金箱を抱えて並び、東日本大震災の復興に向けた義援金を観客たちに呼びかける仕事も加わった。

「ボールガールは二人一組で担当しています。とにかく、ずっと審判を見てますね。ボールを求めるサインを見逃さずですか。それに、審判によってボールを変える頻度が違いますし、サインもそれぞれ癖があります。最近、ようやく審判一人ひとりの癖がつかまってきた」

「まだ、吉田めぐみさんは、「自動車免許を持つてますし、なかなかできない体験だと思って自ら志望しました。客席から『なんばれーつ!』と声がかかると『ちゃんと送り届けないと』と責任感を感じますね」

ボールガールやリリーフカーの運転に加え、diana のメンバーたちは年間シートの観客に対応する受付業務や、乳癌早期発見のキャンペーン「ピンクリボン」の活動にも積極的に携わる。

●主審にボールを届けリリーフカーも

彼女たちの中にはリリーフカーの運転手を務めるメンバーもいる。投手が交替する際、ブルペンからマウンドへとピッチャーを安全に乗せていく重要な仕事だ。もう一人のオーディション・ディレクター岩田えみなさんはいう。

「ブルペンで待機している間は、試合展開がとにかく気になりますね。ベンチからブルペンに電話がかかってくると『そろそろ出動か』と思つて身構えてしまうほど。ですから、電話が鳴ると反射的に緊張しますね」

また、吉田めぐみさんは、「自動車免許を持つてますし、なかなかできない体験だと思って自ら志望しました。客席から『なんばれーつ!』と声がかかると『ちゃんと送り届けないと』と責任感を感じますね」

「本当にファンと接することができるので、常連のお客さまと挨拶を交わすことが多い、うれしいですね」

このように、彼女たちはグラウンドでのダンスのみならず、多方面の役割を担い、試合をサポートする。そして、ファンたんつて、温かい方たちが多くて」

このように、彼女たちはグラウンドでのダンスのみならず、多方面の役割を担い、試合をサポートする。そして、ファンたんつて、温かい方たちが多くて」と語る。野村梨紗さんはいう。

「さまざまな業務を受け持つことで、お客様と身近に接することができるんですよ。常連のお客さまと挨拶を交わすことが多い、うれしいですね」

このようにファンと接するうち、横浜という街そのものが好きになつたメンバーも多い。久保田優衣さんは語る。

「以前は、横浜といえば中華街のイメージしかありませんでした。ところが、いろいろと見て回るうち、横浜の街はジョギングすると気持ちいいエリアがたくさんあると気づきました」

ホッサー や ホッサー、ホッサー ザといふ

つたマスクコットたちと一緒に笑顔で踊り、球場に華を添えるdiana。ベイスターズといつしょに応援してあげてね。▼



diana (ディアナ)

横浜ベイスターズ専属のチアチームとして2006年に結成。"diana"とはイタリア語で「月の女神」を意味し、横浜ベイスターズを明るく輝かせる「勝利の女神」となることを目指している。横浜スタジアム場外のイベント広場「YYパーク」でパフォーマンスショーも行い、ベイスターズファンはもちろん、多くの浜っ子たちから親しまれている。公式ブログ <http://yaplog.jp/yb-diana/>

「お母さん業界新聞」は子育てを支援するタブロイド紙。子育て中のお母さんたちを笑顔にする記事や写真が紙面にあふれている。

同紙の編集長を務める藤本裕子さんは、まず1989年（平成元）に「トランタン新聞」を創刊した。みずから子育てまさかの30代の時である。

トランタンとはフランス語で30歳のこと。それは同時に子育ての世代を意味することばかりであった。

「初めはお母さんサークルでしたが、つい夢中になってしまい会社化してしまいました。でも、まさか50歳代になるまで続けるとは思ってもみませんでした」と藤本さんは朗らかに笑う。

そして3年前、その内容を一新し、「お母さん業界新聞」に展開。その動機は、娘の出産だったと振り返る。

「娘が母となる瞬間、読者に伝えてきた情報とは違うレベルで、母親という存在の素晴らしさをあらためて発見できました。すると、これまで発信してきた情報がちっぽけに思えてきて……。そこで、もっと本気でお母さんの魅力を伝えたいと考え、リニューアルを決意しました」

藤本裕子さん

「お母さん業界新聞」編集長

●お母さんの魅力を全国に伝えたい

●子育てを軸とした地域コミュニティ

●文字では伝えきれないメッセージを歌に

●地域版は、その街に暮らすお母さんたちのネットワークを広げ、地域をつなげていくためのツールにもなっています。

地域版は、編集・発行人がみずから配布もします。配るだけで、お母さんたちが、そして地域がつながるからです。子育て支援を展開中。著書に「百万母力」（論創社）など。

「お母さん業界新聞」は、子育て支援と、同時に、地域コミュニティの活性化にもつながっているようだ。▼

Text by Shinkawa Takashi. Photo by Yabe Shiro.

藤本裕子さん

「お母さん業界新聞」編集長



ふじもとゆうこ

「お母さん業界新聞」編集長、株式会社トランタンネットワーク新聞社代表。1956年、福岡県生まれ。全日空の客室乗務員として勤務した後に結婚し、三女を出産。子育てをしながら慶應義塾大学経済学部を卒業。2008年春に「お母さん大学」を開校するとともに「お母さん業界新聞」を創刊。講演や出版など、多方面で子育て支援を展開中。著書に「百万母力」（論創社）など。

横浜を
ワクワクさせたい。

Yokohama Jelly Beans Club

横浜の魅力をもっともっと高める活動をしています。

横浜信用金庫

横浜ジェリービーンズ俱楽部

横浜のニックネーム
[ジェリービーンズ]
1粒もおいしいけど、
集めてみると
虹みたいにステキな街